

## アセスメントポリシーに基づく検証結果（2024年度）

2025年8月5日

内部質保証向上委員会

2025年3月11日の特別教授会において、東京神学大学アセスメントポリシーに基づき、学修成果達成状況の検証を行った。特に、「在学中」「卒業時（後）」に挙げている指標に基づき、本学の教育効果を検証した。

（学部・大学院博士課程前期課程）

「機関レベル」「教育課程レベル」のいずれにおいても、本学建学の目的である福音主義キリスト教教役者の養成という目標に向けて、教育活動は適切に行われていると言える。

2024年度は、学部4年次在籍9名全員に学位が授与され、留年者はいなかった。卒業した9名のうち8名が、伝道者となる召命を改めて認められ、大学院博士課程前期課程に進学した。進学しなかった1名は、家庭の事情で一旦学びの歩みを中断することになった学生である。

また、大学院博士課程前期課程は、2年次在籍者13名のうち12名が修士論文を提出し、その全員に学位が授与された。残る1名は、家庭の事情で計画的に留年した学生であり、2025年度の課程修了を目指している。修了した12名のうち11名がそれぞれ教会に派遣され、1名は所属する教派の教師となるために、所属教派の神学校に進学した。

このように、大学の教育課程、また大学の歩み全体を通して、高い割合の者が学位を取得し、また伝道者として派遣されるに至っている。もっとも、本年度は学部で2名の中途退学者があったが、いずれも学力の問題であるよりは本人の召命に関わるものであった。従って、直ちに教育課程の問題であるとは言えないが、どのように召命の確立に関わりそれを促すのかについて、常に検証し、さらにサポートできることがあればしてゆきたい。

卒業時アンケートにおいて、学位授与方針に掲げられている各項目について、学部及び大学院博士課程前期課程それぞれでどれだけ身についたかの自己評価を求めているが、どの項目も「十分に身につけた」「ある程度身につけた」の回答が多かった。また、本年度は2月に、在学する全ての学生を対象に学修行動アンケートを実施し、日々の学修行動・学習時間等の調査に加え、上記卒業アンケート同様、学位授与方針に示された各項目について、これまでの学修によってどの程度身についたのかの自己評価を求めたが、そこでも、概ね「ある程度身についた」「多少は身についた」の回答が多く、学生自身も、本学の教育課程を通して、徐々に伝道者とされるための力が身につき、卒業時には一定程度身についたと自己評価していることがうかがえる。但し、学修行動アンケートにおいては、「伝道者が現実に関わる諸課題・諸要求に、多様な協力関係の中での的確に対応する能力」（博士課程前期課程）について、「あまり身につけていない」を選択した学生も多くあり、在学中にはなお、やがて教会や学校等に派遣されてゆくことへの不安を抱えていることが読み取れる。卒業アンケートから、卒業時にはそれが一定程度解消していることもまた読み取れるとはいえ、どのように、諸教会との協力関係の中で、将来派遣された際のことを意識しつつ学びと研鑽に励むことができるようにするのが課題であるかもしれない。

それでも、日本基督教団の教会に派遣された者について、全員が日本基督教団補教師試

験に合格した。さらに、2021年度に卒業して本年度に日本基督教団正教師試験を受験した卒業生の内5名が秋季試験で合格、そこで不合格となった1名も半年後の試験で合格している。(2024年度秋季、2025年度春季の試験では、さらに過年度の卒業生3名が合格し、正教師とされている。) こういったことも、本学の教育課程が伝道者養成のために有効に機能していることを示すであろう。但し、今期は数名の不合格者もあり、卒業後の伝道牧会を通してさらに神学の研鑽を積み、召命に応じて確実に検定試験に合格してゆく神学の力を身に付けることができるよう、どのようにさらに卒業後のサポートができるのかも検討課題であろう。

在学中の成績については、学部・大学院博士前期課程とも、ほとんどの者が大学院内部進学基準あるいは学位授与基準の2.00を十分に越えている。また、修士論文も提出した12名全員が合格した。2024年度は、特別な指導の対象となる「学修に困難を抱える学生」(GPA1.90未満、あるいは単位の修得に2割以上の遅れのある者)に該当する者はいなかった。それでも、2.00に近い者やわずかに下回る者が数名あり、そういった学生がさらに高い学修成果を上げることができるよう、どのように学修支援の体制を整えてゆくことができるのかは課題である。特に、日本語を母語としない留学生のGPAがやや低い傾向にあり、日本語補講などを行っているものの、さらなるサポートが必要であるかどうかは、今後さらに検討すべきであろう。

博士課程前期課程の最終学年での履修を課し、学長が担当する「説教演習Ⅲ」は、学部・大学院を合わせた伝道者養成課程の成果を測る格好の場である。2024年度の授業においては、聖書を読む読み方や、聖書を語ろうとする姿勢はよく身についており、本学の教育課程が有効に働いていることを裏付けているものの、一つのテーマを首尾一貫した仕方で語る力や、文章を組み立て構成する力の不足がしばしば見られたとのことであった。同様の指摘は、これまで夏期伝道実習における教会からの評価の中にも見受けられたことがあり、論理的に考える力や文章の構成力について、どのように向上を図るのが今後の課題となるだろう。

「科目レベル」については、授業効果調査(授業アンケート)において、授業が自らの召命に応える歩みの形成のために役に立ったかどうかとの問いには、ほとんどの学生が「大いに役立った」「ある程度役立った」と答えており、授業が、伝道者を育てるという本学の使命に概ね適するものとなっていることが読み取れる。授業の準備にあてる時間については、シラバスにおいて、1回の授業あたり3～4時間を目安とすることが明記されているが、講義系の科目は1回の授業あたり概ね1時間未満あるいは1時間から2時間との回答が多く、演習系の授業の中には2時間以上との回答が目立つ授業もあった。ほとんどの授業について負担は適切であったとの回答であったが、どのようにその準備学習を指示するのかは今後の課題である。また、同様のことは、学修行動アンケートからも読み取れるが、本学の学生が、教会での奉仕の準備のためにも一定の時間をかけていることもまた読み取れ、そしてそれもまた召命に応じて歩むために必須のことでもあるため、どのように学内の学びと教会での奉仕のバランスを取るのかも、今後課題となってくるかもしれない。

伝道者の養成は、教会との協力の下で進められて行く必要がある。本学では毎年「出席教会牧師と教授会との懇談会」を開催し、その協力関係を深めている。また、夏期伝道実習においても、実習先の教会から、実習した神学生の評価をいただいている。本年度、

出席教会牧師からは、本学とさらなる協力関係を築くためにも、出席神学生の本学での様子を定期的に知らせて欲しいとの要望が出されると共に、自分よりも年上の神学生を指導する場合の困難で悩んでいる様子も見受けられた。また、学部から大学院博士課程前期課程への内部入学者選抜の意味と位置付けについて、再度召命を問い直すという意義が十分に理解されていない場合があることも浮かび上がった。よりよい指導が教会でなされ、教会と一体となって伝道者を養成して行くために、さらに相互理解を深める方法を模索し、協力関係を深めて行きたい。

#### （博士課程後期課程）

博士課程後期課程は、2024年度の在籍者は12名、うち4名が休学した。同年度中の学位取得者はなかったが、2名が論文提出資格試験を受験して合格し、論文提出以外の学位要件を満たした。

博士課程後期課程の生産性向上は、引き続き本学の課題である。学位取得に至らないのは、教会や学校での奉仕の傍ら研究時間を確保することの難しさが主要な原因であり、それは毎年度末に提出を求めている研究報告書からも読み取れる。研究を奨励するために、毎年度後期課程研究発表会を行って2名に研究の発表を求めてきたが、本年度は発表できる状態にある者がなく、既に助教・特任教員として任用され、博士論文の執筆に当たっている2名の教員が発表を行った。また、部門によっては、定期的に博士課程後期課程の学生と研究者による研究会を開き、共同での研究発表の機会を設けるなど、研究の奨励に努めている。

そのような中、論文執筆にかけることのできる時間を少しでも長く与えるために、他大学の例を参考に、博士課程後期課程在籍期間満了まで1学期以上を残して研究指導認定を受けて退学し、3年（長期履修制度利用の場合は1年）以内に論文を提出すれば、本学在学中の研究と指導に基づく成果であると見做して課程博士を授与できる制度が2024年度から導入された。

今後も、制度の改善を含めてさらに何ができるのか検討を続け、「神学における国内外の学界へ学問的貢献ができる専門的学識を有し、高等教育機関において研究者また教育者として貢献し、教会や社会のあり方についての諸課題に深く取り組むことのできる」伝道者を育成することを目指していきたい。